

第五章 動助辭

第一節 總說

敘述性の有る助辭

動助辭は敘述性の有る助辭である。敘述性があるから一般に動詞の様に活用がある。「動助辭」「靜助辭」の「動」は動く意、働く意で「靜」は動かない意、働かない意である。「動」を語が動く

と解すれば動は活用の意になり、意味が動くと解すれば動は事柄を敘述する意になる。

動助辭の附いて出來た連辭は詞として皆動詞である。「ます」「です」は動助辭である。故に「行きます」は一つの動詞である。「私です」は一つの動詞である。「私」は名詞(代名詞)的だから「私です」は動詞(名詞性動詞)である。

動助辭は一般の文法書には助動詞と稱せられて居る。動助辭は「行かない」「行きます」の「ない」「ます」などの様に動詞へ附くものが多いのであるが、「日本です」「東京だ」の「です」「だ」の様に名詞へ附くものも有る。助動詞といふ名稱に囚はれて動詞を助けるものだと説明し、「です」「だ」などを例外とするのは愚なことである。動詞を助けるものが助動詞ならば「行く

所謂動詞

か」「行くや」「見よ」の「か」「や」「よ」なども助動詞となり「日本です」の「です」などは助名詞になる。然るにこれら皆動助辭である。動助辭の解釋はそんなことではない。

動助辭を助動詞と稱するならば「助」の字を獨立しない意に取つて助的動詞と説明するが善い。動詞を助けると解してはいけない。動詞と同様に敘述の力が有りながら動詞と違ふ點は獨立しないことにある。凡そ活用の有るものは皆敘述性がある。活用は敘述の運用を示す所以である。然らば動助辭が敘述性を有することは勿論でなければならない。

動助辭は意義が形式的であつて實質的意義が缺けてゐる。「私は今日これから大に、ます」の「ます」に形式的な敘述の力は有るが、何事を敘述するかその實質的意義がわからない。故に「歌ひます」「遊びます」などの様に「歌ひ」「遊び」などの語で不足な實質的意義を補給する。そういふ點から言へば「歌ひます」では「ます」が主要部で「歌ひ」は從屬部である。しかし「歌ひ」といふ實質へ「ます」といふ形式的意義を附加することも考へられる。それは觀方の相違である。我々はその場合々々で種々の觀方をする。

動助辭の中、特殊な形式的意義を表すもので文法上重要でないものは、之を特殊動助辭又は接尾辭と稱する。例へば「行きにくい」「悲しがる」の「にくい」「がる」の類がそうだ。そう

接尾辭

動助辭の意義上の分類

いふものは特殊な場合にのみ必要なものであつて一般とは言へない。「にくい」や「がる」を使はなくても話は出来る。之に反して「ます」や「た」などを封じられたら殆ど話は出来ない。こゝにいふものを文法的動助辭といふ。この文法的動助辭のことを單に動助辭ともいふ。

使動の動助辭	(切ら)せる	(植ゑ)させる
被動の動助辭	(切ら)れる	(植ゑ)られる
尊稱の動助辭	(切り)ます	
否定の動助辭	(切ら)ない	(切ら)ん
完了の動助辭	(切つ)た	
過去の動助辭	(切つ)たつ	
未然の動助辭	(切ら)う	(植ゑ)よう
當然の動助辭	(切る)べき	(切り)さう
不確の動助辭	(切る)さう	
斷定の動助辭	(靜か)に	(靜か)な
		(靜か)だ
		(靜か)です
		(靜々)と

(切る)し (切る)けれ(ど)

「切りたい」の「たい」などを希望の動助辭として文法的動助辭と見る人も有らう。私は「たい」などは特殊動助辭(接尾辭)へ入れようと思ふ。文法的であるかないかの區別は程度の問題であるから、その人の考へでどちらにでもなるのである。

「如し」

「花の様な」の「様な」や文語「花の如し」の「如し」を動助辭へ入れるのは誤である。「様な」や「如し」は凡べて連體語を受けるものであつて名詞性動詞である。

だらう
でせう
たらう

「だらう」でせう「たらう」などを推量の動助辭と稱して文語の「らむ」などに當てるのは誤である。「らむ」は不確の動助辭であるが「だらう」でせう「たらう」は斷定の「だ」です、完了の「た」へ未然の「う」が附いたもので斷定又は完了の未然である。

「た」は完了である。過去の事件をも表し得るが之を文語の「けり」き」などと同性質のものと思ふのは誤である。

文語の「らし」は不確の動助辭である。之へ口語の「らしい」を當てるのは誤である。「らしい」は類似を表すもので特殊動助辭(接尾辭)である。

動助辭は殆ど全部活用が有るが、唯「遠いさう」「切るさう」などの「さう」には活用は無い。

活用からの
分類

活用はなくても敘述性が有るから動助辭である。

動助辭は自己の活用の上から之を分けると次の如くなる。

動作性のもの

下一段活 れる せる られる させる

特別ラ行變格 た な だ なから(う)

特別サ行變格 ます です

無名の活用 う よう

形容性のもの

ク 活 ない し(第三頁)

無名の活用 ん まい べき

ニ 活 に

ト 活 と

ニ活、ト活の二つはまだ説明してない。

動作性のものは他語へ附くと其の全體が動作詞になる。例へば「れる」は動作性活用である

から「行か」へ附いた「行かれる」は動作詞である。「ない」は形容性であるから「行か」へ附いた「行かない」は形容詞である。「行か」だけとしては動作性でも「行かない」の全體としては一つのク活形容詞となる。

從來の文法書は多く動助辭の活用に下一段活とかク活とかいふ名稱を與へることを躊躇した様である。「れる」「せる」などは立派に下一段活であるのに、之を直に下一段活と云はずに下一段活に似た活用又は下一段活に等しい活用などと稱してゐる。「似た」ではない全く同じである。又下一段活に等しい活用を下一段活でないとする必要が何處に有らうか。蓋し下一段活と云へば完辭に限る様に考へて居たので下一段活といふ意義がよく分らなかつたのであらう。

接續上から
の分類

動助辭はその附く語の活段との關係から分けると次の如くなる。

一般へは……………ない ん

第一活段へ附く四段系へは……………う れる せる

二段系へは……………よう られる させる まい

第二活段へ附く……………ます た さう

第三活段へ附く 一般へは……… しぬ

四段系へは……… まい

第四活段へ附く

な だ 下す に さう し

無活用語へ附く

な だ 下す に こ さう

無活用語とは「静かな日」「静かだ」「静かです」「静かに」「静々々」の「静か」「静々」などの類である。「な」「だ」「です」「に」「を」「さう」「し」は無活用語へ附く。

助動詞の辨

助動詞の辨 助動辭といふ名稱は權川直助、堀秀成、落合父子等の用ゐた名稱であつて動く助辭の意であつた。然るに故大槻文彦博士が英文典などの Auxiliary verb (補助の動詞) の譯語として英學者の間に普及してゐた助動詞といふ語を以て助動辭を指す例を開いて以來、英文典に有る、氣の利いた名稱の様に思はれて一世を風靡してしまつた。然るに英語其の他西洋の助動詞とは形式的意義を表す動詞であつて助辭ではない。日本語で云へば「助けてやる」「教へて下さる」「教へて貰ふ」「書いてゐる」「讀んで見る」「甘つてしまふ」の「やる」「下さる」「貰ふ」「ゐる」「見る」「しまふ」の類に當るもので、決して「ます」「です」の類に當るものではない。私は助動辭を助動詞といふことを好まない。山田孝雄博士其の他私と同説の學者も相當に有る。

第二節 使動の助動辭 附、尊稱

次の助動辭は使役の意を表すものであるから之を使動の助動辭といふ。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

下一活段

〔書か〕

せ せ せる せる せれ

下一活段

〔受け〕

させ させ させる させる させれ

下一活段

〔書か〕

しめ しめ しめる しめる しめれ

此等の助動辭は尊崇の意を表す場合も有る。その場合は之を尊稱の助動辭といふ。

使動の例

雞を飼つて卵を産ませる。

善い種卵を取寄せて巢雞に温めさせる。

彼の言動は世人をしてその人格を疑はしめる。

の「しめる」「させる」「しめる」は使役の意を表すものである。そうして上の「しめる」はその爲さしめる動作である。

太郎が雞に卵を産ませる。

に就いて言へば「産ま」は雞の動作である。「せる」は太郎の動作である。しかし「せる」は意

使動

助動

義が形式的であつて實質的意義が缺けてゐるから「太郎が、せる」と云つては意義が完備しない。「せる」へ實質的意義を與へる爲に「産ま」を冠して「産ませる」といふので「産ま」は「せる」の材料(實質)である。「産ませる」の「産ま」は原辭としての動詞(動詞的原辭)ではあるがまだ一詞を完成してゐないから詞としての一動詞ではない。「せる」まで籠めて「産ませる」全體で一動詞である。しかし「産む」と云へば一動詞である。然らば「産む」と「産ませる」の關係はどうか。

原動と使動

1 雞が太郎に飼はれて卵を産む……………原動

2 太郎が雞を飼つて卵を産ませる……………使動

右の(1)(2)の二つの断句は言ひ方は違ふが同一事件を表してゐる。「産む」は雞の動作として表され、「産ませる」は太郎の動作として表されてゐる。「産む」は雞に對して原動で、「産ませる」は雞に對して使動である。「産む」と「産ませる」は同一事件を異なる立場から觀たものであるから、この二詞は同じ語の變相であると見られる。「産む」の様なものを原動の相と云ひ、「産ませる」の様なものを使動の相といふ。

自動と他動

原動に自動と他動とあることは勿論である。例へば「卵を産ませる」の「産ま」は他動で「下女

に夜使に行かせる」の「行か」は自動である。然るに使動そのものにも自動と他動とある。

下女に夜使に行かせる

子どもに牛乳を飲ませる

下女を夜使に行かせる

子どもを牛乳を飲ませる

セルの客語

原動 使動

セルの客語

飲マの客語

原動 使動

の(1)の「せる」は自動で(2)の「せる」は他動である。「せる」が自動であるか他動であるかは原動の自動他動には拘らない。一に自己の客語が「下女に」「子どもに」であるか「下女を」「子どもを」であるかに由つて決せられる。

使動の客語を(1)の様に「……に」にするか(2)の様に「……を」にするかはその言の目的が違ふ。事柄に重きを置く時は「に」を用ゐ、人に重きを置く時は「を」を使ふ。(1)は用事の遂行で(2)は下女、子どもの處置である。

「せる」「させる」「しめる」は動詞が使動相に在ることを示す動助辭である。

「せる」「させる」「しめる」は皆動作性の活用語の第一活段へ附く。形容性の語へは附かない。

凡そ第一活段へ附く動助辭は之を第一活段所屬の動助辭といふ。

「せる」は四段活系の語——四段、ラ變——へ附き「させる」は一二段系の語——上二、上二、

下二、サ變、カ變——へ附く。「しめる」は兩方へ附くが、もと文語の「しむ」を口語化して用ゐるのであつて純粹の口語ではない。唯文語風な硬著しい言ひ方をする場合に稀に用ゐるだけである。

「させる」が上二段活へ附くとは「感じさせる」「信じさせる」「案じさせる」などいふ場合をいふ。

「せる」「させる」「しめる」は何故に第一活段へ附くか。それは使動の相に於てはその原動の敘述が決定すれば使動としての了解を妨げるからである。第一活段は未然形であつてその敘述が不安定である。敘述が不安定であるから單に使動の材料としての原動を表すのに適當である。

サ行變格の「爲」の使動は本來「爲させる」である。然るに「爲る」は意義が形式的であるから軽く發音されるために「せさ」が約つて「さ」となる傾向が、平安朝末あたりから著しくなり、今日の口語では殆ど専らこの約音が行はれてゐる。既に約音で「させる」となればもはや一原辭であるから「爲せる」は「爲る」の轉活用と見なければならぬ。約音作用は轉活用に越く過程であつてその結果は轉活用である。(第二三頁)

「せる」「させる」の四段活化 使動の「せる」「させる」は下一段活である。然るに西部の言

サ變の使動

四段活化

ひ方では之を四段活にも使ふ。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
四段活	〔飲ま〕	さ _ナ	し _ナ	す	す _{コト}
四段活	〔教へ〕	ささ	さし	さす	さす

「人に酒を飲ます」「酒を飲まさう」「飲ませば幾らでも飲む」などの様に使ふ。正統の東京語では「飲ませる」「飲ませよう」「飲ませれば」といふのであるが近時東京の大發展は夥しく地方人の移住を招致し言語も亦幾分か方言化されつつある。東京産れの人々も往々これらの言ひ方をする様になつた。

文語の「散らす」「枯らす」「馴す」「暮す」などは皆四段活で他動であるが、「走らす」「移らす」「戻らす」「歸らす」などは下二段活の動助辭の「す」が附いたもので使動である。其の間に明確な區別が有る。「走らす」「せ、せ、す、す、す、すれ」などは四段活にはならない。「散らす」は四段の場合他動で、使動の「散らす」とは言ふ心持が違ふ。遠江邊ではこの區別に明瞭な意識を持つてゐるが、この區別に對する意識の不明確になつた地方では「せる」の四段活化が起つたのである。

尊稱の例

殿下は至極御健康に渡らせられる。

天皇は平家に擁せられて矢嶋へ落ちさせられた。

などの様に下に「られる」などの有る場合に限り「せ」「させ」が尊稱に用ゐられることが稀に有る。これは文語の言ひ方を口語化していふのであつて普通の言ひ方ではない。

この「せられる」「させられる」は約つて「つしやる」「さつしやる」となり且つ活用も四段活に變つて一般に用ゐられた時代が有つた。今日でも方言には残つてゐる處が有る。「行かつしやる」「言はつしやる」「起きさつしやる」などいふのは「行かせられる」「言はせられる」「起きさせられる」である。東京語の「入つらしやる」「は既に一單辭となつてゐるが元は「入らせられる」であつて四段活動詞へ「つしやる」の附いた時代の遺物である。

第三節 被動の動助辭

被動

「れる」「られる」の二つは被動の動助辭で、又尊稱の動助辭である。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

下一段活

〔噛ま〕

れ

れ

れる

れる

られ

下一段活

〔抱へ〕

られ

られ

られる

られる

られ

〔被動〕

〔原動〕

子どもが犬に噛まれる。

犬が子どもを噛む。

武士が大名に抱へられる。

大名が武士を抱へる。

右の上段の「——」の動助辭は「——」の動作に關して被動を表すものである。下段の「——」の動詞の様なものを原動の相と云ひ、之に對して上段の「——」の動詞の様なものを被動のと相いふ。「——」は二原辭であるが合體して一動詞である。

「子どもが犬に噛まれる」の「噛ま」は犬の動作で「れる」は子どもの動作である。「噛ま」は敘述が不安定であつてまだ一詞にならず、「れる」は意味が形式的であつて自己だけでは一詞を成さない。「噛まれる」となつて始めて一詞である。「噛まれる」は犬の動作を材料とする所の、子どもの動作である。「子供が」は「噛まれる」の主體であつて之を主語と云ひ、「犬に」は「れる」の客體であつて之を客語といふ。「犬に」は「れる」に掛るので「噛ま」とは直接の

關係はない。「れる」との關係から間接に「噛ま」へ關係する。

被動とは或るもの(例、子ども)が他物(犬)からある動作を蒙ることをいふのであつて被動の被動たる所以は蒙ることそのこと(れる)をいふのである。蒙る所の材料(噛ま)をいふのではない。

被動の主體と客體

被動には主體と客體とある。

被動の主體	被動の客體	被動
子どもが	犬に	噛ま
		れる
原動の主體	原動	

被動の客體は原動の主體である。右の「犬に噛まれる」を原動に改めれば「犬が噛む」である。

右の「子どもが」は主語で「犬に」は客語である。主語は主體を表し客語は客體を表す。主語は事物を主體として取扱つて表し、客語は事物を客體として取扱つて表すのであるから、主體であつても之を主體として取扱はないものは主語ではなく、客體であつても之を客體として取扱はないものは客語ではない。例へば右の「犬に」は「噛ま」の主體であるが「噛ま」の主體として表されずに「れる」の客體として表されてゐるから主語ではない。又

「由つて」の客體
店の改革が 若主人に 由つて 企てられた
「企てられ」の經路

は「改革が若主人に企てられた」と云はない以上「若主人に」は「企てられた」の客語ではない。單に「由つて」の客語である。

以上に擧げた被動は被動の主體が實質的に客體から動作又は利害を被るものであつて之を實質的被動といふ。所謂「受身」である。

形式的被動

然るに次の様なのが有る。

子どもに此の本が讀まれる。(讀める)

劍道の達人に鐵砲玉が受けられますか。

の「も」此の本「鐵砲玉」が「子ども」達人「から受ける動作であるから被動である。しかし語の形式上、意味の形式上被動であるだけで、その語の目的は實は之に由つて客體たる「子ども」達人「の讀む能力受ける能力を表すに在る。こういうのを形式的被動といふ。實質的被動も形式的被動も活用語へ「れる」「られる」を附けることに由つて表される。「れる」「られる」は活用語の第一活段へ附いて、共に一語を成し、被動の語を構成する。そうし

て「れる」は四段活系——四段、ラ變——へ附き「られる」は二段活系——上一段、上二段、下一段、カ變、サ變——へ附く。この區別は使動に於ける「せる」と「させる」との別と同様である。

「せられる」と「される」

「られる」がサ行變格の「爲」へ附けば「せられる」であるが口語では「せられる」は約音で「される」となるのが普通である。この約つた「される」は一語となつてゐるから之を「する」に對する轉活用といふ。(第二二頁)。

但し此の約音は「せ」が清音である場合には行はれない。例へば「信ぜられる」「感ぜられる」「信ざれる」「感ざれる」とはいへない。

此のサ行變格の約音は被動一般に共通であるが、別にまう一つ形式的被動にのみ用ゐられ實質的被動には用ゐられない約音が有る。「行かれる」「見られる」「來られる」が「行ける」「見れる」「來れる」となる類で第二二頁の可能性轉活用が即ちそつだ。

詳しく言へば「れる」が四段活の語へ附くと約音に由つて可能性轉活用(第二二頁)になることが多い。「行かれる」「立たれる」が「行ける」「立てる」となる類である。これは實質的被動には用ゐない。

「られる」が上一段活及びカ行變格へ附くと平易な説話に於ては「ら」が消えることが有る。「起きられる」「來られる」が「起きれる」「來れる」となる類である。これも實質的被動には用ゐない。又下一段で「受けられる」を「受けれる」とい

ふ様なのは方言である。

被動はその原動に對して被動である。使動もその原動に對して使動である。自己に對しては單に動作である。故に被動、使動は之を原動として再び被動にし又は使動にすることが出来る。

「かはい」子どもを世間へ出して人に「蹂まれさせる」。

被動の使動

「下女が主婦に夜遅く使に行かせられる」。

使動の被動

この「蹂まれ」は「蹂ま」を原動とする被動で「蹂まれさせる」は「蹂まれ」を原動とする使動である。

尊稱

主體尊稱

「れる」「られる」は尊稱の動助辭として用ゐる場合が有る。サ行變格の被動性轉活用も尊稱になる。

昨夜の會で宅のお嬢さんが洋琴を弾かれました。

あの方はまう御國へ立たれましたか。

先生の教へられたことはよく覚えて居ります。

十分研究された上で決定される方が宜しからうと思ひます。

の「」は皆尊稱である。皆その動作の主體を尊崇する意を表すから之を主體尊稱といふ。

「……れる」「……られる」及び「爲れる」は主體尊稱である。

「……れる」「……られる」「爲れる」は被動を表すのが第一義であつて、主體尊稱になるのは第二義である。被動の語に何故にこの第二義の尊稱が生じたか。それは賤者が貴者からその動作を賜はる意からである。「御嬢さまが洋琴を弾かれる」はその家の下僕たる自分が「弾く」といふ動作を御嬢様から頂戴する意の被動を利用して御嬢さんを敬ふのである。しかし尊稱は被動の動助辭を利用するだけで被動ではない。被動ならば「弾かれる」の主體(被る者)が下僕又は洋琴でなければならぬが、尊稱では「行か」と「れる」とが二人の動作でなく全く「行く」と同様に一人(御嬢さん)の動作である。故に

尊稱と被動の區別

尊稱の發生

御嬢さまが洋琴を弾かれる………尊稱

下僕が御嬢さまに洋琴を弾かれる………下僕の被動

洋琴が御嬢さまに弾かれる………洋琴の被動

の如く助辭「が」「を」「に」の用法に區別に有る。「……が」は主體、「……を」は原動の客體、「……に」は被動の客體である。

尊稱には「れる」「られる」に客體が無い。單に客語が無いのではない。客體が無いのである。被動ならば「れる」「られる」に客體が有る。被動には客語はない場合が有るが意義上からの客體は必ずある。

被動と尊稱とは文を作る時初步の人が往々誤ることである。主客の關係を考へて「が」「に」「を」等の用法に注意しなければならない。

被動の詳説

被動は詳しく言へば次の五種に分たれる

一 利害の被動 被動の主を一人格として取扱ひ其れが或るものゝ動作に由つて利害を被る意を表す被動である。

子どもが犬に噛まれる。

花が風に散らされる。

利害の被動

武士が大名に抱へられる。女が薄情な男に捨てられる。

の「」は皆利害の被動である。その主たる「」は皆人格として取扱はれ皆利害を被る意が有る。利害といふ中に多くは害であるが、右の「武士……」の様な利を受ける意の場合も有る。これも「抱へられたくない」と云ふ場合は害として表される。

人格とは本來の人格ばかりでなく右の例の「花」の様に被害の主體として擬人される場合も有る。又人格の有るものは皆人格として表されるかといふとそうではない。

君の様な小男にあんな大男が投げられるかい。

の「投げられる」は投げ得る意で「大男」は人格として取扱はれずに物格として取扱はれてゐる。故に「投げられる」は利害の被動ではない。(可能の被動である。)

利害の被動は利害を蒙る意が有るから、利害を受けない場合に用ゐると可笑しく聞える。例へば「酒は人に飲まれる」などいふと酒が迷惑するか光榮を感じるかする様に聞える。英語などの被動には利害の意は無い。之を單純の被動といふ。國語の利害被動で直譯すれば可笑しい場合が有る譯である。

英語などの被動は他動性の動詞にのみ用ゐられなものである。西洋文典が先入となつた人

利害被動の
四種

は自動には被動が無い様に思ひ易いが、國語の被動は自動性の語にもある。「犬に飛びつかれる」「子どもに泣かれる」などはそうだ。

國語の利害被動には次の四種が有る。

1 子どもが犬に噛まれる。(他動)
子どもが犬に飛附かれる。(自動)
動作を自己へ被る。

2 武士が敵に刀を落される。(他動)
武士が敵に手許へ飛込まれる。(自動)
動作を自己の所有物へ被る。

右の(1)(2)は被動の主體(子ども、武士)が客體(犬、敵)の動作を受けるのであるが、客體の動作とは詳しく言へば動作の實質と其れから生ずる利害との二つに分けて考へなければならぬ。(1)では動作の實質をも、それから生ずる利害をも皆自己へ受ける。故に「子どもが犬に噛まれる」は自分(子ども)を噛まれるのである。(2)では動作の實質をば自己の所有物即ち自分の刀、自分の手許へ受けるが、その利害は自分(武士)へ被るのである。

(1)(2)は漢文にもある。英語には(1)(2)の他動のものだけが有る。

3 亭主が女房に癪を起される。(他動)
亭主が女房に死なれる。(自動)
所有物の動作に由つて利害を被る。

4 他人に名を成される。(他動)
他人に成功される。(自動)
他物の動作に由つて利害を被る。

自分はその動作そのものに關係はないが、妬ましさを感ぜしめられるからその害を蒙る。他人の成功は我の不名譽であつて一種の被害である。

被動では動作に二つの方面が有る。第一方面は動作そのものとしての方面で第二方面は我に與へる利害影響としての方面である、だからその利害影響はやはり動作である。この意味に於て利害を被るのはやはり動作を被るの一種である。

(1)(2)(3)(4)を比較すると(1)は動作の第一、第二兩方面を自己へ受ける。(2)は第一方面は所有物へ受け、第二方面を自己へ受ける。(3)(4)に在つては第一方面は自己へも所有物へも受けない。たゞ第二方面だけを受ける。(1)(2)(3)(4)に共通なものは動作の第二方面を自己へ受けることである。此の共通點を捕へれば利害被動の定義が立つ。曰く利害被動は甲のものゝ動作より生ずる利害的影響を乙が被ることを乙の動作として表すものである。

二單純の被動 利害を被る意味その他特殊の意味の無い被動である。日本語固有の言ひ方ではない。

國旗は高く橋上に掲げられた。 家毎に門松が立てられた。

自治制度が布かれ國會が招集された。

の「」の類である。「掲げられ」は國旗の被動であつて「掲げ」といふ原動は「人」の動作である。國旗が「掲げ」といふ人の動作を受けたのであるが國旗は利害を感じない。國旗は人格的に考へられてゐない。單に人が國旗を掲げた動作を、國旗を主體として考へたのに過

ぎない。

彼の利害の被動に於ては其の主が利害を受ける客體の觀念の明確な場合が多い。「子どもが犬に噛まれる」で言へば客體「犬」の概念が明確である。然るに單純被動に於ては客體の概念は常に不明確である。故に

國旗は水夫に高く橋上へ掲げられた。

などといふ「水夫が」といふ客語が有るから國旗は水夫に迷惑又は歡喜を與へられる様に聞えるから可笑しく聞える。水夫が單に動作の客體であるならば、

國旗は水夫に由つて高く橋上に掲げられた。

の如く「水夫に由つて」といふ。「水夫に由つて」は單に掲げられるの方法經路を表すものであつて修飾語である。客體を表しても客體として表すのではない。

故に單純の被動にはその被動に客語が無い。

單純の被動は日本固有の言ひ方ではない。正統の口語には全く用ゐない。歐文直譯風を混和した文語の口語化にのみ用ゐられる。(例、この「用ゐられる」)。

三可能の被動 可能の被動は被動の主體を物として取扱ひ却つて其の客體を人格と見て

客體の能力を表すものである。

被動「覺えられ」の主體 被動「覺えられ」の客體
 そんな難しい字が 小さい子ごにも 覺えられ ますか。
 覺える能力の所有者 能力

の「覺えられ」は可能の被動である。

「覺えられる」は、形式上「難しい字」の動作として表されてゐるが、語の目的は小さい子どもの覺える能力を表すに在る。物の被動を借りて人の能力を表すのである。「覺え」は「小さいごも」の動作であるが「覺えられ」は「難しい字」の動作である。「が」の有るのは主語で「に」のあるのは客語だ。

利害の被動では被動の主は人格を認めるが、可能の被動では被動の客に人格を認め主體をば非人格と認める。

大工が人に雇はれる。 利害 人格「大工が」は主。

あんな大工に家が建てられるか。 可能 人格「大工に」は客。

怠け者が人に信用されますか。 利害 人格「怠け者が」は主。

怠け者に金が儲けられますか。 可能 人格「怠け者に」は客。

主、客の兩方が人である場合にはその中の何れに人格が認められてゐるかに由つて利害にも可能にも聞える。

彼の男は君には投げられまい 彼恐不_レ被_二君僣_一
 君恐不_レ能_レ僣_レ彼

彼の男に人格を認めれば利害となり、君に人格を認めれば可能となる。だから意味の取りやうでどちらにも聞える。

可能の被動に於ては約音(可能性轉活用)も用ゐられる。そうして多く用ゐるのは四段活の語に於てゐるが、約音は動助辭そのまゝの「……れる」と意味のぐはひが少し違ふ。言ふ心持が違ふのである。例へば「讀まれる」と「讀める」との區別で言へば「讀まれる」は被動の剥出で原動にも被動にも注意されてゐるが「讀める」と云へば原動には注意が甚だ浅い。そこで「讀まれる」の方はその人の難易又は便不使位であるが「讀める」の方は眞の能否を表すのに近い。

こんな本は馬鹿々々しくて讀まれやしない。 不使

この本は難しくつて讀めやしない。 不能

といふ様な區別として現れることが多い。多くの場合に約音(可能性轉活用)が用ゐられる。それは「……れる」を用ゐる場合よりは遙に多い。

從來の文法書は可能の被動を單に可能と稱し、それが被動の一種であることに氣附いて居ない。それでは主客の關係がわからないからいけない。可能の被動に在つては主客の關係に注意しなければ惡文惡語に陥り易い。

可能の被動の最も模範的な形は、「何々が何々に何々れる」といふ形であつて

主語 客語

この本が 子ごにも 讀める(讀まれる)

の如くいふに在る。そうして主體の語又は客體の語の下へ「は」「も」などが附いて

この本も子供にも讀める(讀めない)

などとなることが多い。又客體の語が主體の語よりも上に在つて

子ごにもは此の本が讀める(讀めない)

などとなる場合も多い。右の「子ごにも」は動作の主體でなくてもその言はうとする目的なる能力の持主であるから先に言はれるのである。

模範的な形は右の如くであるが被動の客體が客語として語に現れない場合がある。

此の子は難しい本が讀める。(此の子は難しい本が(此の子に)讀める)

の「讀める」には被動の客語が無い。誰に讀めるかと言へば。此の子に讀めるのである。しかし始めに「此の子は」と提示したから再び「此の子に」と言はなくてもわかる。従つて「此の子は」を「此の子が」に改めて

此の子が 難しい本が (自分に)に讀める。

といふことも出来る。

被動の主體が主語に現れないことも有る。

犬が 荷物を 背負ふか。 原動
犬に 荷物が 背負へるか。 被動
主客の轉換が出来る。

と同様に

壁が 歩くか。 原動
壁に 歩けるか。 被動
主客の轉換が出来る。

右の(二)には主語がない。何故か。これは主體と作用と一體となつてゐる作用である。若し

その一體を主體と作用とに分ければ「歩く」の主體は「歩くこと」其れ自身である。即ち主體は「歩くこと」で作用は「出来る」である。

壁に ^主歩くことが ^{作用}出来るか
歩ける

である。主語を用ゐない動詞は外にも有る。「然り」そうです」などもそうだ。

可能の惡文

次の様な文は多くの場合に於て惡文である。

此の子は難かし本を讀めます。 牛は重い荷物を運べます。

私は一杯も酒を飲めません。 私は彼の人を信ぜられない。

これらの「を」(客)は「が」(主)に改めなければ惡文である。「本を讀める」の「本を」が「讀める」の原動に關係するならば誤ではないが、聽く人がさういふ心持にならないから誤とされる。さういふ文は作らないが善い。口でいふ時には大抵の人がそんな馬鹿なことは言はない。

價値の被動

四、價値の被動 價値の被動に於ても「れる」「られる」に約音が行はれる。可能の被動の場合と同様である。

此の酒は一寸飲める。(以て飲むに足る)

彼の男は全く談せない男だ。(以て語るに足らず)

此の筆は中々書ける。(以て字を書くに足る)

二度と見られた顔ではない。(再び視るに堪へず)

の「」は價値の被動である。「飲める」は酒の飲むに足るべき價値を表し、「談せない」は彼の男の語るに足るべき價値を否定に表す。價値の被動も被動である。「飲まれる」の「飲ま」は人の原動で「れる」は酒の被動である。

「飲まれる」といふ被動がさうして主體「酒」の價値を表すか。一般人が飲み得る酒は飲むに足る酒價値ある酒である。飲むことに對する一般人の可能は酒の價値である。そこで「飲まれる」といふ被動に於て飲む人が一般人であつて而もその觀念が注意されない場合は酒の價値を表すことになる。「此の酒は飲める」に於ては「飲む人」は一般人であつて而も注意されてゐない。若し一般人でも特定の人でもその觀念が注意されると

此の酒は誰にも飲める。(誰にもは一般人)

此の酒は私にも飲める。(私には特定人)

の如く可能になる。價值の被動になるのは一般人であつて而も注意されない場合である。故に價值の被動には「れる」「られる」に對する客語を用ゐない。客語を用ゐると客體の能力を表すから可能の被動になる。

羽倉信一郎
氏の創見

自然の被動

私はこれまで價值の被動を可能の被動の一種と思つた。羽倉信一郎氏から人の能力ではない物の價值であるに注意されて始めて氣が附いた。實に氏の賜である。

五 自然の被動 「れる」「られる」の外その約音の用ゐられることは可能の被動、價值の被動に於けると同様である。

子どもの行く末が案じられる。 私にもそう信ぜられる。

泣くまいと思つても泣ける。 こんな拙い字が書けた。

私にもそう思はれる。 近頃どうも酒がいける。

の「」は皆自然の被動である。「案じられる」は誰に案じられるか。其れは親なる私に安じられるのである。「案じられる」は「行く末」の被動であるが其の原動「案じ」は「私」の自然動(無意的作用)である。

自然の被動は人の原動(案じ)の自然を表すに事物の被動(案じられる)を以てするものである。

る。

大主 私 は 小主 子供の行く末が 案じられる

主 子供の行く末が (私に) 案じられる

右の「私」を「案じられる」の單なる主と見るとは出来こない。何となれば「案じられる」の單なる主は「子供の行く末」である。「私」は「子供の行く末が案じられる」全體の主である。故に「私」は大主である。この大主たる「私」はもと案じる人であつて原動「案じ」の主であるから「られる」に對しては客である。故に「私に案じられる」の意である。「私」は「られる」の客であるが之を全體の大主とすれば「私」の如く言へるのである。

自然の被動には被動の客語が無い。右の例の「案じられる」は事柄は「私に案じられる」であっても「私」は用ゐない。それは「私」は無意志であるから原動の主體即ち被動の客體としては注意されないのである。唯全體の大主としては注意されることが多い。

「獨り有る身に秋ぞ知らるゝ」などの「獨りある身」には被動の客語ではない。「獨り有る身に對して」の意である。

自然被動に於ては「れる」「られる」が約音とならずに用ゐられるのは「思はれる」「案じられる」の様な心作用を表す動詞に限る。「書ける」「歩ける」「飲める」などの様な心作用でない動

被動五種の比較

作では必ず約音の方を用ゐる「書かれる」「歩かれる」などいふことは口語にはない。

被動五種の比較 被動の五種の區別の要點は次の如くである。

實質的被動

一、單純被動 旗が立てられた。

被動の主は非人格。 被動の客は非人格で客語が無い。

二、利害被動 子どもが犬に吠えられた。

被動の主は人格。 客は非人格。

形式的被動

三、可能被動 此の本が私に讀める。 此の子が(此の子に)立てる。

被動の主は非人格。 客(可能の主)は人格。 客が大主にもなる。

四、價值被動 此の酒が中々飲めるよ。

被動の主(價值の主)は非人格。 被動の客は一般人で客語はない。

五、自然被動 拙い字が書けた。 私が泣ける。

被動の主は非人格(*自動ならば主語はない)。被動の客(自然作用の主)は特定人で

客語は無い。客は大主にもなる。

即ち人格が被動の主に在るか客に在るか、人格が主語なり客語なりに現れ得るか得ないか、人格が一般人であるか特定人であるかの區別である。

但し人格、非人格とは取扱上からいふのである。人でも品物扱い道具扱いにされれば非人格と見、品物でも人の如く扱はれば人格と見る。

實質被動	單純被動	利害被動	可能被動	價值被動	形式被動	自然被動	被動の主體	被動の客體
							非人格	非人格
	人格	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格。自動の時は主語が無い。	特定人。客語に現れない。大主體になり得る。
	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格。客語に現れ又は大主體となる。	一般人。客語に現れない。
	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格	非人格。客語に現れない。	特定人。客語に現れない。大主體になり得る。

第四節 尊稱の動助辭

ます

尊稱の動助辭には「ます」が有る。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
特別サ行變格	〔受け〕	ませ	まし	ます	ますれ
サ行變格	〔受け〕	ませ	まし	ます	ますれ

「ます」は動作性活用語の第二活段へ附いてその語をして尊稱たらしめる。尊稱には種々有るが「ます」の附いた語はその談話の對者(話の聞き手)を尊崇するものであるから之を對者尊稱といふ。

私は今年檢定試験を受けます。貴方も受けませんか。

まう何も言ひますまい、言つても甲斐が有りませんから。

の「」は對者尊稱である。「受けます」は受ける人を敬ふのではなくその談話の對手を敬ふのである。

「ます」は單に談話の對手を敬ふのである。動作の主體は誰でも善く何でも善い。「私が行きます」「貴方が行きます」「彼の人が行きます」「雨が降ります」「皆言へる。又動作の客體も、誰でも何でも善い。

「ます」と
「侍り」「候
ふ」との別

「ます」は文語の「候ふ」や「侍り」とは違ふ。「候ふ」は尊稱ではなく單にその言を嚴肅にするものであるから、將軍家が人民に達する命令などでも使ふ。「ます」はそうは行かない。「侍り」は卑下の語であるから對者の動作には使へない。「貴方歸りませんか」を「君歸り侍らすや」とは言へない。

まする

「ます」の活用は特別サ行變格で第四活段が「ます」である。しかし稍舊くはサ行變格で第四活段が「まする」であつた。今も極めて鄭重にいふ場合にはこれを使つて

私も参りまする。

さやうで御座いまする。

なごといふ場合が有る。

「ます」は活用語の第二活段へ附くが「仰しやる」「爲さる」「下さる」「入らつしやる」「御座る」の五つに在つては「ます」が附くと第二活段の「り」が音便で「い」になるのが常例である。

1 仰しやいます

爲さいます

下さいます

入ちつしやいます

2 御座います

「御座います」は音便で「御座んす」となり「ます」が「す」などゝなる。

「ます」の第一活段は否定を表すのに専ら「ん」を附けて「ない」を附けない。

「まし」と
「ませ」

「ます」の命令態は第一活段又は第二活段を使ふが、それは右の(1)の四語及び「遊ばします」の一語に限る。

御歸りなさいまし

御休みなさいまし

御待ち遊ばしませ

御出で遊ばしませ

「ませ」の方が「まし」よりは鄭重である。「なさる」では「まし」を用ゐ、「遊ばす」では「ませ」を用ゐる。

往年ラヂオの口上掛が「さ様なら御休みなさいませ」と云つたので新聞などで大分議論が有つたが、これは勿論東京語ではない。古く「なさる」が下一段活の場合は「なされませ」と云つたのであるが、それは今の口語ではない。

「ます」の語源

「ます」の語源は古語の「座す」である。「座す」は「來ませ我がせこ」「おはし座す」などの如く用ゐられ、主體尊稱で活用は四段活であるが、轉じて對者尊稱となり活用もサ行變格となり特別サ行變格となつたのである。主體尊稱が對者尊稱に轉じたことは「御座る」なども同様である。「御座る」は御座が有る意で、元は「貴方が御座る」の如く主體尊稱であつたのが後には「拙者が當家の主人で御座る」などの如く自分のことにも用ゐられる様になつた。又四段活がサ行變格にも用ゐられる例は「います」なども同様である。「ます」の命令が「ませ」と

なるのも元四段活であつた痕跡である。

松尾、安田
二氏の説

「ます」の語源に異説が有る。「參らす」が「まらす」となり「ます」となつたのだといふ。松尾捨次郎氏、安田喜代門氏などの説である。私はそうでない様に思ふ。

尊稱の動助辭には「ます」の外に尙主體尊稱に「せる」「させる」「れる」「られる」が有り對者尊稱に「です」が有る。しかし「せる」「させる」は使動の動助辭で、「れる」「られる」は被動の動助辭であるのを、第二義的に利用して尊稱に用ゐるのであるから、尊稱の動助辭には違ひないとしても本來のものではない。それ故にこゝで説かずに使動、被動の處で説いた。又「です」は斷定の動助辭であつて斷定の意の對者尊稱である。だから斷定の處で述べる。尊稱を表すものに「お歸りなさる」「お歸り遊ばす」「歸り給へ」の「なさる」「遊ばす」「給へ」などが有るが、これは動詞の一種(形式動詞)である。

第五節 否定の動助辭

否定の動助辭には「ない」「ぬ」が有る。この二つは本活用は形容性活用で、それに動作性の轉活用が有る。

本活用

ク 活

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段
 [知ら] [なく] [なし] [なき] [なけれ]

無名の形容性活用

[知ら] [ず] [ず] す ぬ [ね]

轉活用

特別ラ行變格

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段
 [知ら] [なから] [なかり] [なか] [なかれ]

無名の動作性活用

[知ら] ○ [なん] ○ ○ ○ ○ (方言)

皆活用語の第一活段へ附く。活段中の「」は方言である。

「ない」「ぬ」の本活用は形容性活用である。故にこれが附いたものは一つの形容詞になる。

例へば「知らない」「知らぬ」は何れも一つの形容詞である。「知ら」は動作性でもこれは從屬部であつて代表部の「ない」「ぬ」が形容性であるから「知らない」「知らぬ」は形容詞である。

假名遣も知らなくて文が書けますか。 第二活段

字典をあけて見ると大抵な字は知らない字だ。 第四活段

その位なことは是非とも知らなければならぬ。 第五活段 第四活段

ふみは遣りたし、書く手は持たず。 第三活段(不十分終止格)

捜しましても見えません場合は致し方がございません。 第四活段 第四活段

本系の東京語では専ら「ない」を用ゐる。唯特別サ行變格の「ます」へだけ「ぬ」を附けて「ない」を附けない。「ぬ」を「ます」以外の語へ附けるのは本系の東京語ではなくて地方から流入したものである。その第四活段の「ぬ」に至つては全く方言である。「ぬ」は必ず音便の「ん」を用ゐる。

返事もしないで何處へか行つた。 御返事も致しませんで居ります。

返事もせずに居ります。

の「ないで」「んで」「ずに」の様に「なくて」と略同じ意に用ゐられる用法が有る。これは第四活段の「ない」「ぬ」へ「で」が付き、第三活段の「す」へ「に」が附いたものである。この「で」及び「に」は斷定の動助辭(第二頁)である。

「ない」「ぬ」の轉活用は動作性である。だから次の例の様に動作性の語へのみ附くべき「う」や「た」が附く。

彼の人は今日は居なからう。 僕は昨日内に居なかつた。

そうとは知らなんだ。(方言) 一向知りませなんだ。(方言)

「なん」は静岡山梨以西の方言である。「なん」へは「た」が附くが「た」が「だ」になる。「なん」は「すあり」の意の古語「^(不)にあり」から轉じたもので「知らなんだ」は「知ら^(不)にあつた」である。

この「^(不)に」は言はむすべしむすべ知らに「^(不)に」などの「^(不)に」で「ぬ」の第二活段である。文語では此の「^(不)に」へ「た」が附いた「^(不)にて」は約つて「知らで」などの「で」になる。又西部地方の口語では「^(不)にて」が音便で「知らいで」などの「いで」となつた。

東京語では「ます」へは「ない」を附けずに「ぬ」を附けるが「ぬ」には轉活用がないから「ません」へ「た」を附けることが出来ない。そこで「ません」の完了態は「です」を附けた上で「た」を附けて「ませんでした」といふ。「知らなんだ」「知らなかつた」の意、「知らませなんだ」「知らませんでした」の意は方言である。

「ます」へは「ない」が附かないから「知りませなからう」とは言へない。その代りに「知りますまい」が有る。又「ぬ」の第五活段は使はないから「知りませねば」と言はない。

「長くない」「静でない」などの如く形容詞や形容性動作詞の下へ「無い」を附けて、否定の意を表すことが有る。この「無い」は形容詞であつて「有りません」の意である。動助辭の「ない」とは違ふ。それは

知らないで
ませんでし
た

「ない」と
「無い」と

1 長くない 長くはない 長くある 長くありません
静でない 静ではない 静である 静ではありません

2 行かない 「行カハナイ」 「行カアル」 「行カアリマセン」

の如く云つて見ても區別がわかる。(1)の「ない」は形容詞で單獨性が有るから上の語との間に「は」「も」などが入れられる。意味は「ありません」の意だ。(2)の「ない」は動助辭で單獨性がないから上の語との間に「は」「も」などは入れられない。又「ありません」の意ではない。(内)の如くは云へない。(1)の「ない」は「無い」と書いても善いが(2)の「ない」は「無い」と書いてはいけない。

「ない」の語源

「ない」は「ぬ」がク活に變つたもので元東國の方言である。由來東國では「ぬ」に特異な活用が有つた。萬葉集の東歌では「ぬ」が「なは、なひ、なふ、なへ、なへ」と活用してゐる。第四活段の「なへ」は「なふ」の訛音であるから活用はやはり四段活である。その位であるから「ぬ」が後にク活に變つても怪むに足らない。且つ更に深く測れば「ぬ」も「無」も「勿」も同源であるから「ぬ」が「無し」から類推されてク活となるべき理由が有る。且つ直接には今日よりは顧み無くて大君のしこのみたてと出で立つわれは。萬葉集卷二十の「^(不)に」の様に一二段活系の語の名詞化へ「無く」が附くことから導かれる。上が第一活段で「なく」が動助辭だと思はれ遂に「ない」が全くク活化する。

まい 否定の動助辭にはまう一つ「まい」が有る。しかしこれは未然の意の否定であるから未然(第一五頁)の處で述べる。

第六節 完了の動助辭

完了の動助辭には「た」が有る。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
特別ラ行變格	「忘れ、出」	「た」	「たり」	「た」	「たれ」
特別サ行變格	「忘れまし」	「てせ」	「てし」	「てす」	「てすれ」

「た」は動作性活用 of 語の第二活段へ附いて完了の意を表すものである。現在、過去、未來、不拘時の何れにも用ゐられて其の完了を表す。

- 1 御覽なさい、綺麗な月が出ました。 現在の完了
- 2 私は子どもの時は國に居りました。 過去を完了に表す
- 3 借りたものは返さなければならぬ。 不拘時の事件の完了
- 4 明日伺つたらばお目に掛けませうか。 未來の事件の完了

文法上「完了」といふのは事件の眞の終結をいふのではない。假に「我」をその事件の完了後へ置いて考へ、その事件の完了を表すのである。(4)の例で言へば「我」を明日へ置いて考へるから「伺ふ」といふ動作は完了した動作と考へられる。(1)に於ては「我」が現在に置かれてゐるから、その完了は實際の完了と一致する。

(1)の事件が過去に屬することは「子どもの時は」に由つて表されてゐる。「た」が過去を表すのではない。過去の事件を完了として取扱ひ、その完了を表すのである。「た」の自體に過去の意のないことは(3)(4)等の「た」を見てもわかる。(1)(2)(3)(4)の「た」は皆同じ「た」が種々に用ゐられたのである。

文語の動助辭の「き」は事件を過去として追想的に考へるものである。口語で「居りき」を「居つた」と譯するのは直譯ではない。

第一活段の「たら」「へ」「う」が附くと「たらう」となる。「たらう」は文法上、完了未然態である。

御子さんたちは定めし大きくおなりなすつたらう。

あの人の死んだのは十年も前だつたらう。

現在の事件の完了又は過去の事件を、まだ善くわからないとして表すものである。故に之

を未然(まだよくわからない)といふ。未來の事件ではない。

「た」の第三活段「たり」は次の如く不十分終止格となる。

讀んだり書いたりする

行つたり戻つたりむだ足をする

自分も見たり人にも見せようと思ふ。

これは文語の「て、て、つ、つる、つれ」の「つ」に當るもので第三活段である。第二活段ではない。

第五活段の「たれ」は「ば」が附いて「たれば」となり、音便で「たりやあ」となり更に「たら」となる。故に「たら」は第五活段であるが、別に第一活段の「たら」もある。

先月吉野へ行つたら花は散つて居た。

(行つたれば) 第五活段

來月吉野へ行つたら見頃でせうか。

(行きたらば) 第一活段

「たら」は既に「ば」を含んで居るが、「ば」の音意識がないから不十分に感ぜられる場合がある。そこで更に「ば」を附けて「たらば」といふことも出来るのである。

「だ」は「ん」の下及び「ぎ」の音便の「い」の下では變じて「だ」となる。「死んだ」「仰いだ」など。

「た」の語源は「である」「である」が「行きたる」となる。第四活段では更に「る」

が消える。

「てす」は「た」と同義であるが對者尊稱である。且つ必ず「ます」の下に用ゐられる。

昨日一寸鎌倉へ参りました。

あの方も見えましてすか。

もう筈が出ましてせう。

「てす」は「清音」は「です」の類推から出來たものである。「綺麗だ」の「だ」を「です」に換へて「綺麗です」と云へば鄭重な語になるから、「参りました」の「た」を「てす」に換へて「参りました」といふのである。「参りました」が「た」に終ることが粗末な語に聞えるから之を免れようとしたものである。従つて「てす」は極鄭重な語ではあるが、低級な人たちの間に多く行はれる。

完了を表す方法は外にもある。靜助辭の「て」にも完了の意味が有るから「て」の下へ形式動詞「御座る」を用ゐれば「た」と同義になる。

御湯が沸きまして御座います——沸きました

女中が歸りまして御座います——歸りました

但し必ず「まして」の下へ用ゐる。故に「ました」「ましてす」「まして御座います」と段々鄭重

て候ふ

の度を増す。文語では「歸つて候ふ」などの様に「て」の下に「候ふ」を用ゐるが、口語では最も鄭重な語を作る必要からこの法が用ゐられるのであるから、完了を表す爲の「御座る」は必ず「まして」の下へ用ゐられる。

既然

「湯が沸いて居る」「湯が沸いてゐる」などは完了ではない。これは動作の完了の結果を表すものであつて之を既然といふ。

第七節 過去の動助辭

過去の動助辭は過去を追想的に表すものであるが東京語では殆ど絶滅しつつある。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

無名の動作性活用

○ ○ ○ ○ ○ け ○

この「け」は「ける」「け」であるが唯「た」「だ」の第二活段へ附いて「たつけ」「だつけ」となるだけである。「有つたつけ」「そうだつけ」などいふ。しかし東京語では現時殆ど用ゐられなくなつた。東京の近在ではまだ盛に行はれてゐる。

たつけ
だつけ

第八節 未然の動助辭

所謂る未來

未然

「未然」は所謂る「未來」であるが「未來」といふと語弊が有るから「未然」といふ。活用の第一活段を未然形といふその「未然」と同義である。

未然の動助辭には「う」「よう」「まい」の三つがある。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

無名の動作性活用

〔行か〕

○ ○ ○ ○ ○ う

同

〔晴れ〕

○ ○ ○ ○ ○ よう

無名の形容性活用

〔行く〕

○ ○ ○ ○ ○ まい

「う」「よう」は動作性であるから「う」「よう」の附いたものは動作詞になる。「まい」は形容性であるから「まい」の附いたものは形容詞になる。「行かう」「晴れよう」は動作詞で、「行くまい」「晴れまい」は形容詞である。

未然とはまだわからないことを此れからわかるべきものとして豫想した考へである。過去の事でも現在の事でも未來の事でも不拘時の事でも、今まだわからないがこれから先にわ

かる場合があるべきであるとして考へるのである。即ち未來の様に考へるので實際未來であるかどうかは別問題である。

さあ行かう。

どれ出掛けよう。

明日は雨が降るまい。

午後は晴れよう。

の「」などは實際の未來の事件を未然として表す。「行く」といふ動作が今まだ起らないがこれから起るべきものとして表す。

此頃は北國は寒からう。

いやそう寒くもあるまい。

の「」は現在の事柄を表してゐる。未來ではない。現在の事柄であるが果して然るかどうかはまだわからない。調査して見ればわかるので、そのわかることは未然に屬する。

櫻は春咲くだらう。

夏は暑からう。

の「」は時に拘らない事柄である。今まだ果して然るかどうかがわからないが調べればわかるべきものである。やはり未然に屬する。

秀吉が長生をしたら豊臣氏は榮えよう。徳川幕府は成立つまい。

假定された過去の事柄である。未來ではない。しかし、果してそうかどうかまだわからない。

い。推理上そうなるべきを考へるだけで決定は未然に屬する。

昨夜は雨が降つたらう。

去年は豊年だつたらう。

過去の事柄であるが其れが完了として考へられてゐる。そうして智識が不十分で果してそうかどうかはわからないが調べればこれから分り得るものとして表す。これも未然である。

「未然」を「未來」と云ふ人が多いが、其れは實際の未來と誤解したから「未來」と稱せられたので單に名稱だけの無理ではない。

「う」も「よう」も第一活段へ附く。しかし「う」は四段活系(四段、ラ變、特別ラ變、特別サ變)へ附き、「よう」は一二段活系(上一、上二、下一、カ變、サ變)へ附く。特別サ行變格の「ござんす」です「ます」はもと四段活の「座す」から出たもので四段活系である。だから「御座んせう」「でせう」「ませう」といふ様に「う」が附く。しかしサ行變格は一二段活系であるから「しよう」といふ様に「よう」が附く。

「う」は古語乃至文語の「む」の音便である。古くは「う」が一二段活へも附いて「受けう」起きう「爲う」來うなどの如く言はれた。今日でも西部ではそうだ。エ列などへ「う」が附いたものは拗音になるから東部では拗音に分解が起つた。「受けう」は分解されれば「うきよ

「であるが活用意識が語尾を維持するから「うき」とならずに「受け」となり、「受けよう」と云はれるやうになつた。そうして他の場合へも類推が及んで「よう」が確立した。

未然の七方式

現代口語で肯定の未然を表す方式は少くとも七種ある。

一、標準語で「う」「よう」を附ける。

二、中國邊の語で専ら「う」を附ける。「受けう」「見う」などといふ。

三、東京を除く關東東北地方などで「べい」を附ける。「有るべい」「行くべい」などといふ。「へい」は「べき」の音便である。源氏物語などにも「あんべい」とかは「な」などの例が澤山有る。

四、静岡、長野、山梨邊の語で「す」「ず」を附ける。「行かす」「行かず」などいふのは「行かう」の意である。土佐日記に「また罷らず」とあるのもこれだ。第一活段に未然の意が有るのである。「す」は「爲」である。連濁で「す」ともなるので否定の「ず」ではない。

五、「う」の下へ「す」を附けて「行かうず」などの如くいふ。文語の「行かんず」と同様である。九州及び愛知縣あたりに行はれてゐる。

六、第一活段へ「や」を附けて「さあ歸らや」などいふ。「や」は感動の助辭で未然は第一活段が表すのである。出雲邊に行はれる。但しこれは誘導と決心にのみ用ゐる。土佐日記の歌謠の嘲しに「歸らや」とあるのも此れだ。

七、「まし」を誘導の意に用ゐる。「さあ行つたんまし」など遠江邊に行はれてゐる。

「まい」は否定の未然である。四段活系では第三活段へ附く。「行くまい」「有るまい」「行さすまい」などいふ。一二段活系では第一活段へ附く。「見まい」「起さまい」「爲さまい」「来まい」

などいふ。サ行變格へ「まい」を附けた「せまい」は方言である。東京では「せまい」と云はずに上二段上二段にして「しまい」といふ。

「すまい」は方言

遠州語の「まし」

西部地方では凡て「まい」は第三活段へ附く。「見るまい」「起きるまい」「爲まい」などいふ。「すまい」が方言であることを地方人は屢忘れるやうである。静岡邊では「まい」は總べて第一活段へ附いて「行かまい」「有らまい」「せまい」などいふ。古文の「まし」は假定未然である。一般には滅びてゐるが遠江に残つてゐる。

遠江の「まし」は「○、○、○、まし、○」であつて必ず完了の「たり」の第一活段へ附き「たらまし」が「たんまし」となる。必ず人を誘導する場合に用ゐるもので、「さあ出掛けたんまし」「一杯飲んだんまし」などの如くいふ。誘導は對者の賛成を得て始めてその事が決定されるのであるから此の意味に於て古文の「まし」の假定的用法を遺してゐる。決して單なる決心には使はないのである。

第九節 當然の動助辭

當然の動助辭は作用の生すべき潜勢力を表すもので「べき」と「なう」と二つある。

「べき」は文語ではク活で「べく、べく、べし、べき、べけれ」と活用するのであるが口語で

は第四活段が残つてゐるだけである。

無名の形容性活用 「行く」

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

第四活段「べき」は連體格には用ゐるが終止格には用ゐない。「行くべき處」「勉強すべき時」などの如く用ゐる。

此の「べき」は無活用化されて下へ「なら」「で」「だ」「です」などが附く場合が多い。

行くべきである

行くべきならば

行くべきだ

行くべきです

「べき」は「勉強すべき時」などの如く第三活段へ附くのが正しい用法である。しかし俗な用法としては「勉強しべき時」「勉強するべき時」などの様に第二活段第四活段へも附く。

「べし」が第二活段へ附くことは平安朝に於ても上一段活に於ては既に有る。我に似べきは誰ならなくに」土佐日記。二「千代ことに見べき君とし頼まれば」(古今三十七)などの例がある。

「さう」は第二活段だけである。

無名の形容性活用 「居り」

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

さう ○ ○ ○ ○ ○

「さう」が無活用でなくて活用の第二活段である理由は「居りさうも無い」「來さうも見えない」などの如く「べく」と同様な用法(「致格 第二文」)が有るからである。しかし「さう」は無活用化されて下へ「に」「な」「だ」「です」が附き、

居りさうに見える

居りさうな人

居りさうだ

居りさうです

などの如くも用ゐられる。

「さう」は動作性活用の語へは第二活段へ附く「居りさう」「行きさう」など。形容性活用ならば語幹へ附く。「深さう」「浅さう」「苦しさう」「烈しさう」など。但し「善し」「無し」の二つは語幹が一音であるために「善さう」「無さう」とならず「善ささう」「無ささう」となる。しかし「書き善し」「言ひ善し」などの熟語ならば「書き善ささう」「書き善さささう」と兩方言へる。又動助辭の「ない」ならば「居なさう」「知らなさう」などいふ。

又無活用の形容詞へ附く。「丈夫さう」「立派さう」「静さう」など。

「さう」は「べき」の意である。「様」の意ではない。「降りさうだ」は「降るべき」の意である。

「降る様だ」の意ではない。

「さう」の語源

「さう」を「相」と書くのは當字である。「さう」を「様」の音便と思ふのに誤であらう。私は「さう」は「さ」の音便であらうと思ふ。形容詞の語幹へ附くものに「さ、み、げ、ら」などがある。「清さ」「清み」「清げ」「清ら」などとなる。皆さうある様子を表すのであるが、その中「げ」は當然の意を持つ。「心有りげなり」「いと清げに見ゆ」などは皆口語の「さう」の意である。又古く「がに」と云つたのは此の「げ」が「が」に轉じたものであつて意味はやはり「さう」の意である。「雁がね寒し霜も置きぬがに」(萬葉)は「……置きさうに」である。然らば口語の「さう」は「げ」の兄弟なる「さ」の音便であらうと思ふ。

當然の動助辭は「べき」「さう」の二つであるが、當然の意を表す方法は他にもある。「筈」「譯」などを用ゐて「来る筈です」「来る譯です」などと云つても當然の意になる。

第十節 不確の動助辭

不確實

不確の動助辭は知識の不確實を表すものである。文語乃至古の口語には「らむ」「らし」「けむ」「けらし」「めり」「なり」等が有つたが、これら皆「不確」の中ではあるが、各語皆其れれ種々の相違が有る。

現在の口語には唯一つ「さう」が有る。又中部西部には「げな」が有る。

あの人は死んださうだ。

死んだげな

彼處は景色が善いさうです。

善いげにございます

「不確」の相には大體から云つて推量と他説との二つが有る。文語の「死にけむ」「死ぬらむ」などは推量で口語の「死んださうだ」「善いさうだ」などは他説である。他説とは他人の所説であつて自分はよく知らないといふ意である。

「さう」は前頁の當然の「さう」と同源の語であるが意味のくはひと用法が違ふ。

〔當然〕

死にさうだ——動作性活用第二活段へ附く。

死ぬさうだ

遠さうだ——形容性活用第三活段へ附く。

遠いさうだ

立派さうだ——無活用第三活段へ附く。

立派ださうだ

第四活段へ附く。

當然と不確

不確の「さう」には活用が無い。活用が無くても動助辭である。動助辭とは敘述性の有る助辭である。大抵活用が有るが「さう」一つ活用が無い。「さう」は無活用で形容性であるから無活用の形容詞と同様下へ「だ」「です」などが附く。たゞ「な」を附けて

彼の人は死んださうな。(方言)

などいふことは東京語には無い。「さうだ」と言へば善い。(當然の「さう」は「死にさうな人」などの様に「さうな」が有る)

「げな」は中部西部の語である。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

方言
ニ 活 [死んだ] ○

特別ラ行變格 [死んだ]

げなら げに ○ げなり げな げなれ

語源は固より文語の「げ」である。但し文語の「げ」は無活用であつて「當然」の意である。文語の「らむ」は九州四國では「らう」となり駿遠參甲信邊では「ら」となつて残つてゐる。

遠州で「有んな」「善かんなどいふのはざつと「有るだらう」「善いだらう」と意譯されるが、實は「有るな」「善かるな」の音便で「な」は「なる」の「る」が消えたのである。

第十一節 斷定の動助辭

「に」と及び「な」だ「です」

断定

と に

な だ です

「に」「と」の二つと「に」の轉活用の「な」だ「です」の三つは斷定の動助辭である。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
ニ 活	○	に	○	○	○
ト 活	○	と	○	○	○

「に」の轉活用は

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
特別ラ行變格	[静か]	なら	なり	な	なれ
同	[静か]	だら	だり	だ	だれ
特別サ行變格	[静か]	でせ	でし	です	ですれ

ニ活の第二活段は「て」が附くと約音で「にて」が「で」になる。

この五つ及び當然、不確の「さう」は他の動助辭と性質が違ふ。他の動助辭は凡て活用語へ附くがこの五つと「さう」とは無活用語へ附く。例へば「人です」「静かです」「人として」「静々と」「人」「静か」「静々」は無活用であつてそれへ「です」「と」が附いてゐる。「遠いです」「有るです」などの例も「遠い」「有る」の活用を固定させて無活用化した上で「です」が附くの

である。

此の五つは無活用語へ附いて之に活用を附與するものである。例へば「静か」は活用がないが「静かです」とすれば特別サ行變格の形容性動作詞になる。

「に」とは
靜助辭では
ない。

斷定の「に」と「と」は從來誤解されて居た。活用が無いものとされ靜助辭と思はれてゐた。甚しきは「静かに」「静々と」などの様に「に」と「と」まで込めて一つの副詞であると思はれて居た。それは間違で「に」と「と」は活用が有り敘述性が有る。確に動助辭である。唯第二活段だけで他の活段が缺けて居るばかりに無活用と思はれたのである。

「静かに」は
副詞ではな
い。

今「静かに」「長閑に」などの「に」が動助辭であることを證明する爲にニ活とク活とを比較して論ずることにする。

形容性

ク活

「静け」

く

く
アムテ
ルナ

し

き

けれ

形容性

ニ活

「静か」

〇

に

〇

〇

〇

ク活の第二活段には五つの用法が有る。

一 中止格と稱する用法

中止格

風は静けく、日は麗らかだ。

風は静かに、日は麗らかだ。

の「静けく」は風の狀態を敘述しつゝ意味が中止する。この「静けく」を副詞だと云ひ得る人は無からう。立派に形容詞である。そうして「静かに」も同様である。

二「て」して「を」附ける用法 理由を表すもので之を方法格と名づける。

風が静けくて 春の様だ。

風が静かにて 春の様だ。 (「にて」は約音で「て」となる)

副詞には「て」は附かない。「頗るて」「最もて」「抑もて」など云へない。「て」の附くのは動詞(動作詞、形容詞)に限るのである。

三 副詞の如く用ゐられる。之を狀態格と名づける。

あたり 静けく 夜は更けた。

あたり 静かに 夜は更けた。

「静けく」は下の「更けた」を修飾する點は副詞と似てゐるが「あたり」を主語として之に對して敘述語を成すから副詞ではない。副詞は敘述語にはならない。敘述語になる以上何處までも動詞(形容詞)である。「静かに」も同様だ。

狀態格

方法格

一致格

四「なる」する」などの上に用ゐられる。客語になるのである。之を一致格といふ。

風が段々静けくなる。

天下を平けくする

風が段々静かになる。

天下を平かにする

「静けく」「静かに」は下の「なる」の意義の不完を補ふ。これらが副詞でないことは英文法を學んだ人にはよくわかる。

轉活用

五轉活用の元になる。「静けく」へ「あり」が附いた「静けくあり」の約音から「静けかり」が出来る。「静かに」へ「あり」が附いた「静かにあり」の約音から「静かなり」が出来る。全く同一筆法である。

右の五つの用法がク活とニ活と全く同様である。唯「静けく」は一辭であるが「静かに」は二辭である。だから「く」は語尾だが「に」は助辭である。助辭であつて活用が有るから動助辭である。

「に」は名詞(原辭としての)へ附くこともある。その用法は唯右の用法中の「三」の状態格が無いだけで別のものではない。

父は醫士に母は看護婦であつた彼は幼時から醫學に興味を持った。「二中止格

彼は生れが北國にて雪などは珍しくない。「にて」は約音で「で」となる。「三」て」を附ける用法

細君が氣狂に、彼の人になつた。「三一致格

父も軍人なり、子も軍人だ。「五轉活用

此等の「に」は皆敘述性が有る。敘述性の有ることは上に・・・が有つてその主體を表して居る點で明である。

「一」の「氣狂に」は主語たる「細君が」に對する敘述語である。下の「なつた」は「細君が氣狂に」の全體を客語とするものである。「波靜に海はなりぬ」などと同じ云ひ方である。「なりぬ」は「波靜に」を客語に取る。

上に主體のない場合でも敘述性は有る。

子どもが大きくなる。

彼の山は高く見える。

子どもが大人になる。

彼の山は高山に見える。

の「大きく」に敘述性が有ると同様「大人に」にも敘述性が有る。唯「大きく」は形容詞で「大人に」は名詞性形容詞であるだけの相違である。

「と」が動助辭であることも「に」の類推でわかる。唯「と」には「三」の中止格がなく、又口語で

「と」の用法

「何々」とは副詞ではない。

は「至」の轉活用が無い。今「に」と比較して例を擧げる。

「に」の例

「に」の例

一 風は靜かに 日は麗だらか (ナシ)

二 貴方は丈夫にて羨しい 雀はチュウ／＼とて鳴く

三 聲爽かに答へる 聲はつきりと答へる

四 靜かになさい しかつかりとなさい

五 靜な(る)天氣 「堂々たる態度」文語

名詞性の語へ附く場合も同様である。但し「三」はない。

二 大臣にても畏れない 大臣とても畏れない

四 大臣になる 大臣となる

五 明日が日曜な筈 「彼が豪傑たる理由」文語

「大臣に」と「大臣と」も名詞性形容詞の第二活段である。但し「舟に乗る」「人と交る」などの「に」とは靜助辭である。こういう「に」と「と」を混同してはいけない。

次に轉活用の「な」「だ」「です」の例を擧げる。

形容性の無活用語へ附く例

身體が丈夫ならば勉強が出来る。身體も丈夫なり學問も出来る。

身體が丈夫な方が善い。身體も丈夫なれば學問も出来る。

彼の先生は親切だらう。彼の先生は親切だった。

皆丈夫だつて風も引かなかつた。

此の子は丈夫だ。此の子が丈夫なものです。

花の中で菊が一番綺麗でせう。彼の方は若い時には綺麗でした。

取扱も鄭重でして室も綺麗です。まあ綺麗ですこと、この花は。

名詞性の語へ附く例

私ならばそうは言はない。親も親なり子ども、子どもだ。

彼んな男が軍人な筈がない。親も親なれば子どもだ。

休みだらう、昨日運動會だった。もう大學でせう、此間まで中學でしたが。

今日は立派な役人です。

活用語の第四活段を實質化させたものへ附く例

有るならば有ると云へ。

教科書は買ふなり借りるなりなさい。

字も巧いだらうが繪も巧い。

そういふことは無かつたです。

「な」の由來

「な」は文語では「なる」である。ニ活の「に」へ「ある」が附いた「にある」が約音で「なる」となり略音で「な」となるのである。又第五活段の「なれ」へ「ば」が附いた「なれば」は「なりやあ」となり「なりや」となり「なら」となる。第一活段の「なら」とは違ふ。

「だ」の由來

「だ」は「たる」の「る」が消えたものである。ニ活の「に」へ「て」が附いた「にて」が約音で「で」となり「で」へ「ある」が附いた「である」が「ぢやる」たる「となり」る「が消えて」「ぢや」「だ」となる。「ぢや」は西部の語で「だ」は東部の語である。西部では「ぢや」「を」「や」ともいふ。「今日は日曜や」「なにいふ」。

「です」の語源

「です」は「でございます」が次の如く漸次變化したのである。

何々でございます——でござんす——でござんす——でござんす——でござんす——で
げんす(でござんす)——でげす(でがす、でござす)——でます——(でおす、であす)——
です(だす、どす)

「です」の語源、三矢説と安田説

この「です」の語源説は故三矢重松博士の説である。これに對して異説がある。「何々でおはす」が「何々でわす」となり「何々だす」「何々です」となつたといふ。安田喜代門氏(國語法概説)の説である。

「に」の用法

「に」の用法 斷定の動助辭「に」(ニ活)の用法は既にざつと説いたが、その一致格としての用法は尙詳説する必要がある。

一 致性動詞

動詞の一種に一 致性動詞といふものがある。「子供が大きくなる」「息子を醫者にする」の「なる」「する」の類である。この例では子供と大人との一致、息子と醫者との一致を表す。一 致性動詞は自分でその一致の對手を表すことが出来ない。必ず他語を客語に取り客語をして一致の對手を表さしめる。「大人に」「醫者に」は子供、息子の、他と一致する其の一致の對手である。之を一致の客語といふ。そうしてその格は一致格である。

又本來は一 致性動詞でないものでも、之に「なる」「する」の意味を含ませ「なる」「する」と同じ形式に用ゐればその動詞は一 致性を帯びる。之を一致態といふ。「出る」「行く」「着る」「切る」などは本來は一 致性がない。しかし

息子が小僧に出る。

娘が嫁に行く。

晴衣を寝巻に着る。

鯛を刺身に切る。

の如く用ゐれば一致性を帯びる。「小僧に出る」は「出る」には違ひないが「小僧になる」のである。「寢巻に着る」は「寢巻にする」のである。そういふ風に皆「なる」「する」といふ意を含んでゐるから、「出る」意味「着る」意義には一致の客語は要らないが、その含んだ「なる」「する」の意義に一致の客語が要るのである。

一致格は名詞の格ではなくて動詞の格である。「大人に」「醫者に」は名詞ではなく名詞性の動詞である。頭には名詞的意義があるが下部の「に」には動詞的意義が有る。だから「に」は活用が有る。

一致格はその用法の上から三種に分ける。事物の一致格、形容の一致格、動作の一致格、この三つである。

一 事物の一致格 これは事物と事物との一致を表すもので、名詞へ動助辭「に」の附いたもの即ち名詞性動詞から成立する。右に挙げた例は皆そうだ。「小僧」「嫁」「寢巻」「刺身」皆事物である。そうして「に」まで込めて名詞性動詞である。この「に」は靜助辭の「に」ではない。「舟に乗る」「此處に居る」などの「に」と混同してはならない。

二 形容の一致格 これはある事物に關して其れと状態との一致を表すものであつて形容

事物の一致格

形容の一致格

詞より成る。

子供を丈夫にする。

息子が立派になる。

笛の音が、微かに聞える。

花が綺麗に咲いた。

私は君の態度を傲慢に感ずる。

私はあの人を無遠慮に思ふ。

の「」は状態である。「△△△」は「」の動作に由つて「」なる状態と一致する。

此の用法は副詞と誤解され易いが、形容詞の一用法であつて副詞ではない。

三 動作の一致格 これは或る事物に關して、其の動作と或る動作との一致を表すものである。これに二種有る。

1 町へ野菜を賣りに行く。

飯を食ひに家へ歸る。

遊びに出る。

碁を打ちに来る。

「」の動作が「」の動作と一致する。「」(野菜を賣り)は目的の動作であつて「」(行く)はその方法の動作である。そうして「」は目的であるが「に」が附いて方法になる。別の語で翻譯すれば

町へ行つて、その動作を野菜を賣る方法にする。

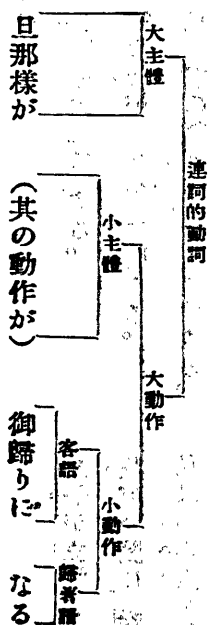
動作の一致格

目的

である。故に「行く」は「行く」の意と「する」の意とを兼ねてゐる。「野菜を賣り」は「行く」に含まれたる「する」の意に對する客語である。之を目的の一致格といふ。目的の一致格は動作詞へ「に」の附いたもの（動作性の形容詞）から成る、そうしてその歸著語は必ず「行く」來る」などの様な移動性動詞の、一致性を帯びたものから成る。

2 旦那様が御宅へ御歸りになる。先生がお賞めになる。

これは「△△」の動作が「——」と一致する。「△△」と「——」と一致するのではない。「△△」のそれの動作が「——」と一致するのである。この一致格は必ず「なる」といふ動詞に對して客語になるもので之を尊稱の一致格といふ。直に旦那様の動作を表さず旦那様の動作の其の又動作を表すから尊稱になるのである。「旦那様の、その動作が今までは御留りといふ動作であつたが今度變じて（その動作が）御歸りといふ動作になる」の意である。



「て」の用法

小主體は常に「其の動作」であつて一定してゐるから之を語に表さない。

「て」の用法 = 活の「に」の下に靜助辭の「て」の附いた「に」は約音で「で」となる。此の「で」は方法格であるが、これに二種の用法が有る。

「單純な用法 斷定の意の方法格として極めて單純な用法であつて「にして」であつて」の意である。

今日は祭日で諸官省は休みだ。此處は靜で勉強が出来る。

今日は祭日で明日は日曜だ。此處は靜で彼處はさう／＼しい。

これらは確定的用法である。

期限は一箇年で差支ありませんか。何なら二年位にませうか。
業務に不熱心で客に不親切で、それで店が繁昌しませうか。

これらは假定的用法である。何となれば一箇年であるかないか、不熱心かどうかを決めずいふのである。この假定的用法は「は」「も」を附ける場合が多い。

一箇年では困ります。一箇年でも構ひません。

不熱心では繁昌しません。不熱心でも繁昌します。

「で」の假定的用法

「で」の特殊用法

二 特殊な用法 特殊な用法が六種有る。何れもちよつと斷定の意味が無い様にも見えるが、實は皆斷定の方法格である。

材料又は道具を敘述する「で」

1 洋紙は木屑で作る。

日本酒は米で拵へる。

小刀で鉛筆を削る。

玄能で頭を殴る。

この用法は材料又は器具を表すものである。「木屑を以て」「小刀を以て」の意と解して「で」を接尾辭の様に考へてはならない。「で」はやはり斷定の助辭である。やはり「木屑だ」「鉛筆だ」の意が有る。何が木屑であり何が鉛筆であるか。それは材料が木屑であり、器具が鉛筆であるのだ。

洋紙は、材料が木屑で、之を作る。

道具が小刀で、鉛筆を削る。

である。しかし「木屑で」「道具で」といふ敘述に對する主體は材料又は道具に決まつてゐるのであるから、主語を用ゐない。凡そ主體が一定してゐる時は主語は用ゐない習慣である。主語はなくても主體は有る。故に「……で」の敘述性は失はれない。「で」は何處までも斷定の動助辭である。

原因を敘述する「で」

この(1)の用法は材料又道具の觀念が「……で」の主體である場合である。そうして「材料」と「道具」とは何れも方法物である。故に「方法物」といふ一概念に統一される。

2 火事で家が焼ける。

病氣で人が死ぬ。

酒で身をあやまる。

相場で身代をなくす。

この用法も「火事に因つて」「病氣に因つて」と解して「で」を接尾辭と見てはならない。これは原因を敘述するもので、これも方法格になるのである。

原因が火事であつて家が焼ける。

原因が病氣であつて人が死ぬ。

である。「火事である」「病氣である」の主は原因に一定してゐるから主語を用ゐないのである。「で」に主が無いのではない。

3 東京で學問する。

山で木を伐る。

茶屋で休む。

電車の中で眠る。

これも單に「東京に於て」と解してはならない。この「……で」は場所の觀念を主體とした敘述である。

場所を敘述する「で」

場所が東京であつてそうして學問する。

場所が茶屋であつてそうして休む。

である。

4 日本で抗議を申込む。

私の内で新年會をやります。

私の市で水道を引く。

客が有ると臺所で忙しい。

「日本で」は「日本が」の代りになる。これは動作の主と動作の場所とを表はすものである。

動作主と場所とは日本であつて抗議を申込む。

主催者と會場とは私の家であつてそうして新年宴會をやります。

國語の習慣として、動作の主を人格として取扱へば「が」を用ゐて主語にするが、動作の主

を場所として取扱つた場合には「で」を用ゐる。だから

私が新年會をやります。

私の家で新年會をやります。

下女が忙しい。

臺所で忙しい。

の如く用ゐ分ける。

5 商人が銀行で金を借りる。

生徒が學校で叱られる。

動作の客體
と場所を敘
述する「て」

坊主が檀家で御馳走になる。

隣で見舞に來た。

「銀行で」は「銀行から」の代りになる。これは動作の客と場所とを兼ね表すのである。場所だけが銀行であつて貸し手が友だちでもあつたならば右の様には云はない。右の例は

借り先と借り場所とが銀行であつて商人が金を借りる。

である。これも動作の客を人として取扱へば「先生に叱られる」の如く「に」を用ゐ、場所として取扱へば「先生から叱られる」の如く「から」を用ゐ、人と場所を兼ねてゐれば「學校で叱られる」の如く「で」といふのである。

6 三人つれで行く。

兄弟で喧嘩をする。

友達どうして議論する。

家中で遊ぶ。

この「……で」はなにかま(共同者)を主體とした敘述である。

仲間(つれ)が三人づれであつて、そうして行く。

である。

形容性活用
の特徴

形容性活用の特徴 形容性活用の模範的なものはク活シク話である。第一六——一六頁に舉げたク活の第二活段の五用法の中(三)(四)(五)の三用法は形容性活用にのみ存して動作性活

動作の共同
者を敘述す
る「て」

用には無いものである。故にこの三用法中の一つでも具へて居ればそれは動作性活用ではないので約り形容性活用である。ニ活、ト活は此の三つを全部具へてゐるから明に形容性である。

序に他の動助辭の「ぬ」(否定)や、完辭の「此う」「其う」などに就いて一言しようと思ふ。

否定の「す、ず、ぬ、ね」の第二活段は文語では

遠からず歸朝せむ。(近く)

(三)の用法 (第八頁)

道も分らずなりぬ。(分らなくなつた)

(四)の用法 (第八頁)

圖らずありき。(ざりき)

(五)の用法 (第八頁)

の如く用ゐて形容性活用特有の三用法を具へてゐる。「ず」の第二活段は口語では用ゐないが文語に由つて形容性であることがわかる。口語に用ゐる活段のみに就いて言へば、形の上からは證明が附かない。意義の上から言へば「ぬ」「ね」は事柄の存しない状態をそのまゝ表すのであるから形容性である。但しラ行變格系の活用にして「ざり」「なかり」と云へば靜止的動作として表すから動作性に變る。

「まい」はシク活の「まじき」の言便「まじい」の轉訛であるから形容性である。「へん」はその

語源がク活であるから形容性である。且つ文語と別にして言つても「まい」の「い」は「遠い」「近い」などの「い」と同じ心持で言はれるのであるし、「へん」の「ん」は「遠き」「近き」などの「き」と同じ心持で言はれるのであるから形容性として感ぜられる。

「此う」「其う」「彼あ」「どう」「いかゞ」は

こ(う)斯(の)如(く)暑(く)てはやりきれない。(三)の用法

こ(う)なることは始めから知れてゐた。(四)の用法

の如く(三)(四)の二用法が有るから形容性である。(五)の用法(轉活用)がないのは別に「こんな」が有るからである。文語では「斯く」「しか」「さ」に「斯かり」「然り」「然り」とふ轉活用が有る。そうして「斯く」「しか」「さ」が副詞でない證據には「斯くて」「さて」の如く「て」が附く。口語でも方言では「こ(う)て」「そ(う)て」などいふ處が有る。

「し」及び「けれ」

斷定の動助辭と云へば文語ならば「なり」「たり」の二つを挙げ、口語ならば「な」「だ」ですの三つを擧げるのが最も普通の説である。

「し」「けれ」は動助辭である。

松下直明の新説

本書はその外に「に」との二つを擧げた。「に」との方は靜助辭の様に思ふ人が多いにしても、之を斷定の動助辭へ入れることはそう飛び離れた所説ではない。しかし「し」及び「けれ」を動助辭として取扱ふことは最も新しい説である。だから本書は特に「し」「けれ」を引き放して一款を立てることにした。

「し」「けれ」が動助辭であることを發見したのは私の長男名は直明の考である。

庭は狭いけれども日あたりは善い。

毎日學校へは行くけれども勉強はしない。

の「けれ」はク活形容詞の語尾の「けれ」が助辭化したものである。昔は必ず「狭けれども」の如く言つたのであるが、その語尾の「けれ」が助辭の如く感ぜられたために、「狭」といふ語幹へ附かずに「狭い」といふ第四活段へ附くことになつて「狭いけれども」など云ふ様になり、「けれ」が助辭となり切つた爲に、形容詞のみならず動作詞へも行く様になつて「行くけれども」「見るけれども」などのやうにも言ふ様になつたのである。この「けれ」がク活の語尾の助辭化であることは何も私の新説ではない。一般に知られてゐることであつたのである。そうして誰も皆「けれど」「けれども」といふ助辭と思つてゐたのである。

庭も狭いし日あたりも善い。

學問も深いし世才も有る。

文も巧いし字も巧い。

詩も作るし歌も詠む。

これらの「し」を私ども、最初サ行變格の動詞の「爲」が助辭化したものと思つた。しかし後にそうではなくて形容性活用 of ク活の語尾の「し」が助辭化したものであることを知つた。それは

(1) 庭も狭いし 日あたりも悪い。

(2) 庭は狭いけれども 日あたりは善い。

を比較して見ても分る。(1)と(2)とは同義で、(1)と(2)とも同義で、而も(1)對(2)の關係は(1)對(2)の關係と同様である。「狭し」の「し」はク活の第三活段の語尾で用法は不十分終止格(第二―欠頁)である。一度終止し直ぐに又下へ續く用法である。この語尾の「し」が助辭の如く感ぜられた爲に第四活段狭い)の下へも附くことになつたのである。そうして完全に助辭化した結果動作性の語へも附いて「作るし」「讀むし」などの如くも云ふ様になつた。「狭し」と「狭

いし」とは口語で全く同義である。その言ふ心持は「爲」とは違ふ。故に助辭「し」の語源は語尾の「し」であつて、決して「爲」ではない。これは私の發見である。しかし私は「けれども」と「し」をク活の語尾から轉じた靜助辭と思つた。動助辭とは思はなかつた。それは考がまだ至らなかつたのであつて、自分の子供の考に因つて訂正された。

私はこゝに愚息の考を記載する。その考に曰く、「ク活の活用は

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
ク 活〔狹〕	く	く	し	い	けれ
特別ラ變〔狹〕	から	かつ	○	○	○

この活用の語尾がそのまゝ動助辭になつて次の圖の様に活用語の第四活段へ附く。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
ク 活	(く)バ	(く)ナ	し	い	けれ
特別ラ變	(から)ッ	(かつ)ッ	○	○	○
種々の活用	遠く	遠く	遠し	遠い	遠けれ
	知らず	知らず	知らず	知らぬ	知らね

東京語では第三活段の「し」と第五活段の「けれ」だけを使い、他の活段は用ゐないが方言では右の各活段が用ゐられる。たゞ第四活段を用ゐない。

ク活 く、く、し、い、けれ	
道が遠い くらば車に乗るが善い。	第一活段 方言
知らん くらばお聞きなさい。	第一活段 方言
道が遠い くて早くは行かれん。	第二活段 方言
その位のことば知らん くてはならん。	第二活段 方言
道も遠い し天氣も悪い し一寸行かれんない。	第三活段 東京語
動め先も知りません し住ひも知りません。	第三活段 東京語
遠い けれども道は善い。	第五活段 東京語
その位のことば知らん ければならん	第五活段 方言
特別ラ變 から、かつ、○、○、○	第一活段 方言
その道は遠い からう。	第一活段 方言
それは貴方も定めし知らん からう。	第一活段 方言

道が大變に遠い。かつた。……………

第二活段 方言

其れは私も一向知らん。かつた。……………

第四活段の「い」は「遠い」「近い」の如く「い」が重つて不明瞭になるから用ゐない。

方言では形容性活用の第四活段へ附くのである。東京語では「し」と「けれ」を用ゐるのみであるが、其の附くのは形容性活用だけでなく一切の活用の第四活段へ附く。「行くし」「行つたし」「歸るけれども」「歸つたけれども」などみな言ふ。

東京語では「し」と「けれ」を用ゐるだけであるから、其の活段は

無名の活用 「遠い」 ○ ○ ○ し ○ ○ けれ

の如くであるとも言へるが、しかし方言では各活段が使はれるのであるから、その本活用はク活で、轉活用は特別ラ行變格だとして動助辭とすべきものであらうと思ふ。』

以上は愚息の新意見である。私は之を是認する。愚息は昭和四年五月廿二日滿二十一歳に達せずして夭折した。まだ學生の身であつたので何一つ學界に貢獻する所などが有りやうもなかつたが、強ひて言へば「し」「けれ」が動助辭であつて活用はク活その轉活用は特別ラ行變格であるとの一説を遺したのである。斯ばかりのことを大袈裟に書き立てる愚さを耻

「し」「けれ」
の效果

ちつゝも一寸書いて見るのである。

「し」「けれ」の意義はどうか。これは前語の第四活段を實質化して其れを「し」「けれ」に由つて再指し一つの形容として敘述するものである。故に分類上斷定の動助辭の中に算ふべきものである。そうして其の效果は前語の活用の不備を補ふことに在る。方言の「から」「かり」なども同様である。之を詳説すれば、

一 形容性活用及びラ行變格系の活用の第三活段は「天氣も惡し、道も遠い」の「惡し」の様に、不十分終止格になるが、ラ行變格以外の動作性活用には之に當る活段が無い。しかし、「し」を附ければ、「し」はク活であるから不十分終止格になる。例へば「降る」は動作性活用であつて不十分終止格はないが「し」を附ければ不十分終止格になる。

雨も降るし道も遠い。

天氣も惡し道も遠い。

この「し」と「けれ」は同じ格で不十分終止格である。

二 文語の活用の第五活段は「ども」が附いて「惡けれども」「降れども」などの如くいふことが出来るが、口語では其れが出来ない。しかし動助辭「けれ」だけは「ども」を附けることが

「けれ」

出来る。そこで一般の語へ「ども」を附けたい時には直接には附けずに「けれ」を附けた上で「ども」を附ける。

雨は降れども路はまだ善し。 文語

雨は降るけれども路はまだ善い。 口語

右の文語の「――」は口語の「――」と同じ格である。

三 否定の「ず、ず、ぬ、ね」は未然の「う」と完了の「た」が附かない。しかし「から」「かり」を附けた上ならば「う」「た」を附けることが出来る。方言では之を利用する處が有る。「知らんからう」「知らんからう」の意、「知らんかつた」は「知らなかつた」の意になる。又否定の「ね」を用ゐない地方では「知らねば」の代りに「知らんければ」といふ。但し東京語では「ない」の轉活用が有るから「知らなからう」「知らなかつた」といふ。又「ねば」の代りに「なければ」といふ。但し東京語でも「ます」の下では「ぬ」を附けて「ない」を附けないから、「……ません」の未然と完了は、「ませなからう」「ませなかつた」とは言へない。これが救済法としては未然には「まい」を用ゐて、「知りますまい」「知りませなからう」の代り」と云ひ、完了には「でした」を用ゐて「知りませんでした」「知りませなかつた」の代り」といふ。

「から」
「かり」

方言

接續詞と稱せられる
「けれども」

「し」「けれ」が斷定の動助辭として前語の活用の不備を補ふ點は「な」です」と同一筆法である。例へば口語では「行かば」とは言へないが「行くならば」とはいふ。「行けども」とは言へないが「行くけれども」とはいふ。即ち第一活段へ「ば」を附けたい時には「なら」を用ゐ、第五活段へ「ども」を附けたい時には「けれ」を用ゐる。又否定の「ず」へは「た」が附かないが、「かり」「でし」の下へは「た」が附くから、「た」を「ず」へ附けたい時は、近畿以西では「知らませんでした」「行きませんでした」など云ひ、東京では「知りませんでした」「行きませんでした」などいふ。

「けれ」は約音で「け」となることが有る。疎略な言語に於ては「善いけど」「行くけど」などいふ。地方に因つては又音便で「けれ」が「けん」となり「けれど」が「けんど」となる處もある。

形式動詞化 「けれ」は語尾から動助辭になつたのであるが更に形式動詞ともなる。

卒業はした。けれども善い成績ではなかつた。

の「けれ」などがそうだ。前言に寄生して前言の實質的意義を自己の意義に利用するのである。こゝにいふ形式動詞を寄生形式動詞といふ。世にこゝにいふのを接續詞ともいふが、それは俗解である。

第十二節 特殊の動助辭 接尾辭

接尾辭

前節までに擧げた動助辭は、極めて一般的な文法上の形式的意義を表すもので、之を一般性の動助辭とする。この外にも動助辭と稱すべきものは澤山有る。例へば

がる	四段活	悲しがる	面白がる	通人がる	上手がる
ぶる	同	先生ぶる	紳士ぶる	奥様ぶる	金持ぶる
めく	同	田舎めく	西洋めく	古めく	生めく
つく	同	がたつく	がりつく	うろつく	べたつく
ばる	同	くたばる	へたばる	ちらばる	のさばる
びる	上一段	田舎びる	都びる	幼びる	古びる
じみる	同	百姓じみる	商人じみる	田舎じみる	西洋じみる
ける	下一段	とろける	のろける	たはける	にやける
たい	ク活	飲みたい	食ひたい	行きたい	歸りたい
くさい	同	西洋くさい	支那くさい	田舎くさい	古くさい

ぼい	同	哀つぼい	水つぼい	白つぼい	垢つぼい
らしい	シク活	男らしい	ばからしい	雨らしい	風らしい
がましい	同	議論がましい	理屈がましい	晴がましい	鳴呼がましい

これらは特殊な形式的意義を表すもので文法上からは基礎的なものではない。之を特殊の動助辭とする。世間ではこういうものは接尾語と稱せられてゐる。

動詞へ附く特殊動助辭(接尾辭)の中には詞としての一動詞ともなるものが有る。文語の「住み習ふ」「降りまさる」「怨み果つ」などの「習ふ」「まさる」「果つ」はこの場合は特殊動助辭(接尾辭)になつてゐるが、「住みや習へる」「降りぞまされる」「怨みも果てず」などいふ場合は立派に單獨性が有るから一つの形式動詞である。獨逸文典に所謂分離動詞の類である。後者の場合は詞としての一動詞だが前者(住み習ふ)などの場合は上辭と熟合して一單辭化され、自己(習ふ)はその一部分であるから接尾辭である。こういう類の接尾辭は文語にも口語にも非常に澤山有る。

分離動詞